

古英語のēodeとゴート語のiddja Old English *ēode* and Gothic *iddja*

森 基雄
Motoo Mori

要旨

古英語において‘go’を意味する動詞であった長形gangan (<Gmc *gang-a-)と短形gānのうち、ganganは強変化動詞7類として分類され、その過去形としては本来の強変化動詞7類としての重複形*gegang-に由来するgēongを有したが、gānは不規則動詞として分類され、不規則な過去形ēodeを有した。またēodeはganganのもう1つの、しかも散文ではむしろ一般的な過去形でもあった。同様に、OE ganganに対応するGo gagganは不規則な過去形iddjaを有した。このように‘go’の過去形としてはまったく不規則な形態を成すēodeとiddjaの成り立ちと両者の語源関係についてはこれまでにさまざまな提案がなされてきたが、本稿ではこれらの提案に基づき、歴史的な観点からēodeとiddjaの成り立ちとその真の姿に迫った。

キーワード：古英語とゴート語の動詞の不規則な過去形

1. ēodeとiddjaの間に語源関係はないとする説

まずHolthausen (1903: 342)によると、ēodeはPOE *eudaを反映するものであり、この*eudaに理論的に対応するゴート語形はiddjaではなく*iudaであると考えられることから、ēodeとiddjaとの間には語源関係はないという。そしてēodeの起源の解明につながるかもしれない例としてHolthausenはLat vādō ‘go’、vadum ‘Furt(歩いて渡れる)浅瀬’、OE wadan ‘go’ (OS wadan, OHG watan, ON vaða)を挙げ、ēodeはそのアオリスト(aorist、限定過去)に由来するとしている。すなわちēodeという形のもとになったのは直説法3人称複数IE *e-udh-nt ‘they went’ > OE ēodon、希求法3人称複数IE *e-udh-int > OE ēodenであり、古英語の希求法ではi-ウムラウトは放棄されたため、本来予想されるOE *iedenとはならず、-don、-denで終わるこれらの形が弱変化過去と解釈されたことが直説法1、3人称単数ēodeの形成につながったという。そして希求法においてもまた、もともと単数形がIE *e-udh-jē、複数形がIE *e-udh-i-であったが、ゲルマン語派では単数形の接辞*-jē-が複数形のそれであった*-i-に取って代わられた結果、単数形はGmc *eudi > POE *iedi、そしてi-ウムラウトの放棄により直説法1、3人称単数と同形のOE ēodeとなったという。さらにHolthausenが指摘するように、もし仮にアオリストの直説法1人称単数IE *e-udh-omがそのまま古英語に継承されていたならば、それはOE *ēodとなっていたであろうし、2人称単数IE *e-udh-esであれば、*ied (ウェストサクソン方言)、*iod (非ウェストサクソン方言)となるのが本来の発達であったと考えられる。すなわち音韻法則的に発達した直説法3人称複数ēodon、そして希求法の単数ēode、複数ēodenが直説法1、3人単数の新形態ēodeの形成につながったのだという。そしてFlasdieck (1937: 63)がHolthausenの見解を支持し、OE

ēodeはGo iddja、そしてその同根語の例としてよく挙げられるSkt āyātとも語源的に無関係であるとしている。

これに対し、Hogg & Fulk(2011: 319)は、Lat vādō、OE wadan は IE *weH₂dh- に由来すると考え、IE *e-udh- のような、ゲルマン語においてはこのケース以外にはそのなごりらしきものすら見当たらない加音*e-を前提とし、しかも喉音(laryngeal)の反映が考慮されていない Holthausen の提案を疑問視している。仮に喉音を反映するアオリスト形であった場合でも IE *e-uH₂dh- > *e-ūdh- > Gmc *eud- となり、結果は同じēodeであったと考えられる。しかしOE wadan が Lat vādōと同根であることを前提とするならば、wadan自体がゼロ階梯の*wH₂dh- と解釈せざるを得なくなるであろう。すなわち*wH₂dh- はwadanではなく*uH₂dh- > *ūdh- > Gmc *ūd- > OE *ūdanとなるのが本来の発達であろう。このようにIE *weH₂dh- という前提からは生じ得ないと思われるwadanがどのような過程を経て生じたと解釈すべきであろうか。

Müller(2007: 104)は OE wadanの過去単数wōd、複数wōdonの前提となるのがIE *wewoH₂dh-、*wewH₂dh- であったとしている。そしてこの場合、重複(reduplication)は放棄され、前者はそのままOE wōdとなるGmc *wōdに、そして後者は語根初音*wの母音化により、本来なら*uH₂dh- > Gmc *ūd- となったと考えられるが、過去形として一般化されたのは実際の強変化動詞6類に合致する前者からの発達形*wōdに基づくwōdonであったということになる。また Müller は Rix (2001²: 664)と同様、現在時制の基礎となったのが語根現在、すなわちathematicなIE *weH₂dh-、*wH₂dh- であり、Lat vādōは直接*wH₂dh- から発達したのに対し、Gmc *wad- はゼロ階梯ながらも*uH₂dh- (> Gmc *ūd-)ではなく、*w- が類推的に母音化を免れた*wH₂dh- に由来すると考える。そしてこのGmc *wad- がthematic化されたものがOE wadanとなったということになる。

従ってHolthausenのように ēodeがwadanと同根であることを前提とすれば、ēodeはIE *e-uH₂dh- に由来するものと解釈できると一方、Müllerの提案する類推的なゼロ階梯*wH₂dh- > *wad- に基づくアオリスト*e-wad- が形成され、これが*eud- > ēodeとなった結果であったという解釈も可能かもしれない。

2. ēodeとiddjaとは関係ありとする諸説

これに対し、ēodeと iddjaとの間には何らかの関係があるとする見方が一般に有力視されているようであるが、細部においては意見が分かれている。

まず Sehrt(1944: 240)は、OE ēodeはGo iddjaと同根であり、アオリストかつ未完了形のIE *e-jā-t (Skt āyāt < yā- 'gehen, fahren') に由来するとしている。Sehrtによると、そのゲルマン祖語形は(*ejō- >) 単数形*ijōm、*ijōs、*ijōt、複数形*ijōm(i)、*ijōp(i)、*ijōntであったが、語尾が弱変化過去のそれと類似していたために弱変化過去のそれに従った結果、複数形が*ijōdum、*ijōdup、*ijōdunなり、*ijōdum、*ijōdunが*iōdun、そしてēodonとなり、ここからdが単数形に導入された結果がēodeであったという。そしてもちろんこれは中間段階の*iōd- を経ていることが前提となる。確かに*iijōdum、*ijōdunは規則的に*iōdunとなるとも考えられるが、古英語の動詞では複数形はすべて3人称形に統一されたことから、*ijōdum、*ijōdup、*ijōdunは一挙に*iōdunへと統一されるという見方がむしろ妥当であろう。また*ijōm、*ijōs、*ijōt、*ijōm(i)、*ijōp(i)、*ijōntはゴート語にiddja、*iddjōs、iddja、*iddjōdum、*iddjōdup、*iddjōdunをもたらし、2人称単数と複数形全体が例えば弱変化動詞nasjan 'save' の過去形nasidēs、nasidēdunのような形に従いōがēに置き換えられた結果、ゴート語形の2人称単数*iddjēs、複数iddjēd- となったという。

しかしēodeについて(*ijō > *iō >)*iō > eoのような過程を前提とする見方に対しては、ēodeとiddjaとは無関係とするFlasdieck(1937: 63)は当然ながらすでに否定的であり、その根拠としてマーシア方言とケント方言のgiiodunのような例外を除き、iōを有する例が現れることはないという点を指摘している。このことがēodeとiddjaとの関

係を否定する決定的な根拠となるとすれば、Sehrtの見解は否定されてしまうことになるであろう。またGo iddj-はGmc *ij-ではなく*ijj-の反映であるとする定説に反し何の釈明もなく*ij->Go iddj-という過程を前提としている点から見ても、Sehrtの見解が支持を得ることは難しいであろう。

その後OE ēodeとGo iddjjaの成り立ちと両者の関係を詳細に論じたものとしてまず注目されてきたのがCowgill (1960) であろう。

Cowgillによると、OE ēodeはGo iddjjaとともに athematic な語根 IE *ej- 'go' (Lat īre、Gk eimi、OLith eimi、Skt émi、yánti) に基づく形態であり、OE ēodeの成り立ちは次のようなものであったという。すなわちその前ゲルマン語における出発点は完了形でo-階梯の1人称単数*eója、3人称単数*eójeであり、強勢の語頭音節への推移とo>aの変化によってそれぞれ*éaja、*éaje、そしてさらにjの消失によって*éaa、*éaeとなり、そしてどちらも*eōを経てWGmc *euとなり、そこへ弱変化動詞の接辞が付加された結果、OE ēodeとなったという。しかしCowgillの提案するこの*eōに至るプロセスについてはHogg & Fulk (2011: 319) 以外の学者たち、とりわけ以下に取り上げていくLindeman、Seebold、Schmidt、Mottauschは明確に疑念を表明している。

またCowgillは、Go iddjjaのもととなったのはIE *ej-の前ゲルマン語における完了形*eójeとゼロ階梯の3人称複数*eijjūtであったとしている。しかしCowgill (495) は3人称複数がもとから*eijjūtであったわけではなく、本来は*ejūtであったはずであり、*ejūtであれば*ejunを経て*ijunとなってしまうであろうから、Go -ddj-を説明できるのは*ijjunであるとしている。

それではiddjaの前提となる*ijj-はどのようにして形成されたのであろうか。Cowgill (496) によると、強変化動詞1類の単数形*bhe-bhójd-e 'split'、*re-rójd-e 'rode' のような形をモデルにして*eójeが形成されたと考えられるように、複数形*bhe-bhid-ūt、*re-ridh-ūtのような形をモデルに完了複数*e-i-ūtが形成され、自動的にわたり音が発生した結果*e-ij-ūt (>*ijjun) となったという。

このように前ゲルマン語において形成された*eóje、*eijjūtが音変化により*eō、*ijjunとなったことと現在形*ej-の消失により、過去形としては、特に単数形と複数形の関係についての透明性が失われた孤立した状況に陥っていたのではないだろうか。Cowgill (498f.) によると、Gmc *eō、*ijjunはそれぞれGo *ia、*iddjunとなるのが規則的な音変化であるが、*ia 'I, he went' はGo sandida 'I, he sent' のように弱変化過去の末尾の接辞母音と同じ*aを有していたことが孤立の解消へとつながったとしている。すなわち*iaは語根*i-と弱変化過去の接辞-daを思い起こさせる*aから成るという分析が可能だったのであり、さらにこの分析は過去現在動詞 witan 'know' の過去形で弱変化のwissa 'I, he knew' によってもまた促進されたのではないかという。そこで単数*i-aと複数*iddjunとの間で均一化が起り、複数形の語幹iddj-が一般化され、そこから単数iddjaが形成されたという。そして複数においても同じく弱変化過去複数sandidēdun、wissēdunのような形をまねて*iddjunからiddjēdunに移行したという。

Lindeman (1967: 280-286) は Sehrt と同様 ēodeとiddjaの原点を*jā- (>Skt yā-) と同一視しているが、*jā-についてはさらに詳細な分析により、それはIE *H₁ej- 'go' のゼロ階梯の拡張形*H₁jeH₂- (Lith jóju、jóti 'gehen, reiten') に由来するとしている。そしてēodeとiddjaはともにその完了形に由来するとして、以下のような成立過程を提案している。

まず*H₁jeH₂-の完了形は印欧祖語において次のような規則正しい変化表を構成していたという: 単数1人称*H₁e-H₁jóH₂-H₂e、2人称*H₁e-H₁jóH₂-tH₂e、3人称*H₁e-H₁jóH₂-e、複数1人称*H₁e-H₁iH₂-mé、2人称*H₁e-H₁iH₂-tē、3人称*H₁e-H₁iH₂-ūt。

ゲルマン祖語の段階に入ると、喉音に起因するもののほかにさまざまな音変化や変化表内での類推による均一化

の結果、次のような変化表に至ったという：単数 1 人称*ejā、2 人称*ejā-t(h)a、3 人称*ejā、複数 1 人称*ejā-mé、2 人称*ejā-té、3 人称*ejā-ŋt。これらはさらにゲルマン祖語における音変化も加わり、単数では 1、2、3 人称がそれぞれ*ejō、*ejō-t、*ejō、複数では*ej-um、*ej-up、*ej-unとなり、これらが強変化動詞 7 類 *gang-a- 'go' の補充過去形として用いられるようになったという。こうなると、これらの過去形はもはや本来の重複形と認識されることはなくなったものの、強変化動詞 7 類の例えば'sow' (Go saian) の過去形で 1、3 人称単数が*se-zō、3 人称複数*se-z-un (Go saisō, *saisōun) のタイプと同様の形態を示していたことになる。そしてゲルマン祖語において 7 類では 1、3 人称単数が*-ōで終わる過去形はすべてこのように重複によって特徴付けられていたため、*H₁jeH₂- の過去形も過去形としてもっと明確に特徴付けられた形となる手段として類推的に強変化動詞 7 類に侵入した。すなわち 7 類の Go -aikan (af-aikan 'deny') の過去形で-aiaikのような同じく母音で始まるタイプのものをまねて、*ejō、*ej-unは再び重複により*e-ejō、*e-ej-unとなり、さらに*jの前でのe>iの変化により*e-ijō、*e-ij-unとなったという。

そしてゴート語期に入ると、*e-ijō、*e-ij-unは*ejjō、*ejj-unとなり、再び重複過去形とは認識されなくなり、*ejj-は*ijj-を経て、単数形がiddja、*iddjōt、iddja、複数が*iddjum、*iddjup、*iddjunとなり、単数ではiddjaが*wissa、walida (不定詞waljan 'choose') のような弱変化過去形の影響により弱変化過去形と解釈されるようになると、同じく 2 人称の*iddjōtが 2 人称単数過去形wissēs、walidēsのような弱変化過去形の影響により*iddjēsとなり、さらに複数形も*wissēdum、wissēdup、wissēdunのような弱変化複数の影響によりiddjēdum、iddjēdup、iddjēdunとなったという。

他方、西ゲルマン語では状況は大きく異なる。2 人称単数はゴート語（そして北ゲルマン語）において理論上の前提となる接辞IE *-tH₂e (Go, ON bart 'you carried') を反映する上記の*e-jō-t>*e-ijō-tに対し、西ゲルマン語ではOE bære、OS、OHG bāriの末尾に見られる特有の接辞を有していたと考えられる。しばしばこれは例えばGk éphuges 'you fled' に見られるアオリストの接辞IE *-esの反映とされてきた。しかしIE *-es は Gmc *-izとなり、西ゲルマン語においてはIE *-is>Gmc *-izと同じく重語根の後では消失するのが本来の発達である。このことはOE fēt 'feet' <Gmc *fōtiz<IE *pōdes (Gk pōdes)、OE giest、OS、OHG gast 'guest' <Gmc *gastiz<IE *ghostis (Lat hostis 'stranger, enemy') のような例からも明らかである。従って重語根の後でもOE -e、OS、OHG -iとして保たれる接辞は短母音iではなく長母音īを含んだ接辞であったと考えられるのである。こうした 2 人称単数の接辞の起源としてまず考えられるものとしては、Lindeman (285) が主張するように希求法の*-iz があり (OE bære、OS bāris、OHG bāris、Go bēreis、ON bærir)、これが希求法からの借用によるものなのかどうかはともかく、西ゲルマン語では 2 人称単数は理論的には*e-ij-izに移行したという解釈が成り立つであろう。そして 1、3 人称単数*e-ijōは接辞の*-ō>*-uの変化により*e-ijuとなり、西ゲルマン語では*priju (Go prija) 'three' >OE þrio、þreo (OS thriu、OHG driu) のような例が示すように音連続*-iju- においては*-j- は消失し、また*narjis (Go nasjis) 'you save' >EOE *neris>OE neresのような例が示すように*-j- は*iの前では消失することから、1、3 人称単数*e-ijuと複数*e-ij-u- において*-j- が消失した結果、それぞれ*ēju、*ej-u- となり、2 人称単数*e-ij-izにおいて*-i- の前の*-j- が消失し、またこのようにして母音間に位置するようになった*-i- が*-j- となった結果*e-izとなり、さらにこの*e-izにおいて再び*-i- の前の*-j- が落ちた結果*e-izとなり、またこのように*-j- が消失した 2 人称単数の影響で類推的に 1、3 人称単数と複数においても*-j- が消失したという。従って古英語期に入る前段階としての西ゲルマン語における理論上の変化表は次のとおりであった：単数 1 人称*eu、2 人称*e-iz、3 人称*eu、複数 1 人称*e-um (Lindemanは表記していないが、同様に複数の 2 人称は*e-up、3 人称は*e-unということになる)。このように孤立した過去形の変化表が持ちこたえられるはずもなく、過去語幹として一般化された*eu- が弱変化形に移行した結果がOE ēode、ēodonであったという。しかし後続の*i、*j は北・西ゲルマン語では通例であったe>iの上げを引き起こすことなく消失したとい

うことになるが、この点についての Lindeman による説明はない。

Seebold (1970: 174) は Cowgill, Lindeman と同様、出発点はアオリストや未完了形ではなく完了形であったとしながらも、重複 (reduplication) の失われた母音交替形を前提としている。Seebold は 'go' の語根は Gmc *ejj- だったのであり、さらにこれは語根末に喉音を有する *ejH- にさかのぼると考える。これは *jH > *jj という音変化を前提としたものである。この音変化に相当するかもしれない、あるいはこれを裏付けるかもしれない例として Seebold (1970) が挙げているのが IE *gonH-/gnH- (> Gmc *kann-/kunn-) 'kennen, können' であり、*jH > *jj は *nH > *nn とともに共鳴音 + 喉音 > 共鳴音 + 共鳴音という音変化を反映するものであるとしている。すなわち IE *ejH- から完了形 *ojH-/jH- が生じ、これが Gmc *ajja/ijjunt となったという。そして本来これは Go *addj-/iddj- となったはずであり、*iddj- は Go iddja, iddjēdun をもたらすことになる。そして *addj- は *addi となるものと思われるが、*addi/iddj- という過去形がいったんは成立していたとしても、それは過去形の変化表としては孤立したものであったと考えられるため、アプラウトを持たない弱変化型へと移行し、単数に由来する *addi は放棄され、複数に由来する *iddj- が一般化されたという。

ここでまず生じる疑問は *jH > *jj、そして初音節での *jj- > *ijj- という音韻法則が本当に存在したのかということである。そこで Seebold (1970: 174) は *ijj- に至ったと同じ経緯を有すると可能性のある例として Gmc *eww- を有する強変化動詞を挙げ、独自の過程と音変化を提案する。Seebold は Go bliggwan 'schlagen' ~ blaggw ~ bluggwun ~ bluggwans (OHG bliuwan ~ blou ~ bluwun ~ gibluwan) を例に取り、同じくゼロ階梯の過去複数 bluggwun に注目し、これは *-ww- > *-uww- > -uggw- を反映するものであり、*-ww- は音節主音的な流音 (*r, *l)、鼻音 (*m, *n) と同様その前位置に支え母音 (Stützvokal) を自発的に発達させたのであり、これと同様のことは *jj- にも当てはまるとしている。すなわち *ijj- の前提となるのは Gmc *ejj- のゼロ階梯 *jj- が支え母音を発達させた結果が *ijj- であったという。

しかし 'go' が語根末に喉音を有していたかどうかは疑問であり、これは共鳴音 + 喉音 > 共鳴音 + 共鳴音という音変化を正当化するためだけに Seebold が考案した ad hoc な音韻法則でしかなく、また *kann-/kunn- における *nn が *nH > *nn という音変化によるものとする Seebold の見方そのものも一般に支持を得られてはいないようである。

他方、OE ēode についてであるが、Seebold (175) は前記の Gmc *ajja/ijjunt は OE *æġ/ijon となったとしている。Campbell (1959: 45)、Hogg (1992: 58) で述べられているように、これは Gmc *ajj- > WGmc *aij- > POE *aj- > (i-ウムラウトにより) OE æġ- という音過程の結果であり、また Gmc *ijj- は本来 OE *ij- となったと考えられることから、*ajja > *æġ は正しいとしても、*ijjunt は *ijon ではなく *ijon となるのが本来の発達であろう。*ijjunt から *j が 1 つ消失した発達形 *ijon を仮定していることについての Seebold の説明はないが、それは *ajj- が *aij- となったことに対応し、強変化動詞 1 類の過去形としてのアプラウトの通例の様式に従い、過去複数では *i が短母音 *i に置き換えられたということを前提とするものと考えられる。そして古英語ではゴート語とは逆に ēode は単数 *ajj- に基づくものであったとして、Seebold (175) はこれが弱変化動詞 2 類型の過去形 *ajjōda となり、*æġude を経て縮約過去形 ēode となったと主張する。しかしここでまず問題となるのは母音間の ġ [j] を有する *æġude という形である。このように過去形 *ajjōda を前提とするならば、もちろん実在形としては実証されないものの、その 2 類としての理論上の不定詞と考えられる *æjōjan > *æjejan > *æjjan > *æjan = *ægan がいったん形成されていたかもしれない。すなわち ēode は Seebold が仮定する *ajjōda のような古い段階にさかのぼる形成ではなく、従って (*ajjōda > *æjōde >) *æġude のような中間段階としての形は形成されず、より後期の段階でじかに不定詞 *ægan から 2 類型の過去形 *æōde が形成され、これが ēode となった一方、*ægan は早くに消失したという可能性も考えられるかもしれない。その根拠としては、Seebold が仮

定する*ægudeを前提とした場合、*g が通例形ēodeの形成につながるような一貫した削除を受ける環境にあったとは考えにくいからである。なおHogg & Fulk (2011: 283) によると、弱変化動詞 2 類の過去形を形成する接辞 Gmc *ōd- は古英語では本来これに*uの後続する複数形では*-ūd- となり、さらにこれが短化された結果-ud-, -od- となり、それ以外の場合には*ōd- は*-ūd- ではなく-ad- となり、ウェストサクソン方言では前者が、非ウェストサクソン方言では後者が一般化された。

もう 1 つの問題としては、*æ+Gmc *ōd- はēoではなくGmc auの反映に等しいēaを有する形ēadeをもたらしのではないかという疑問が生じるが、ウェストサクソン方言では一貫してēode、すなわちGmc euの反映に等しいēoを有する形が現れる。しかしGmc eu>OE ēoとGmc au>OE ēaが綴り字の上で混同して現れる他の方言ではēodeと並んでēadeも見られる。確かにこれは綴り字の上での混同による結果に過ぎないとも解せるが、ごく一部であれ、Gmc auの反映との融合も起こっていた可能性も完全には否定できないかもしれない。あるいはēadeは非ウェストサクソン方言ではæにもっぱら-ad- が後続した結果とも考えられる。

Bammesberger (1984: 92f.) は、ēodeについては完了形の強交替形*e-oj- に基づくとするCowgillの見解を支持している。iddjaについても弱交替形*e-ij- がGmc *ijj-, そしてGo iddj- となったとするCowgillの見解は容認しつつも、Gmc *ijj- については別の解釈を提案している。‘go’の語根は強変化動詞 4、5 類型の*e+子音 j、すなわち*e-j-, 従ってその弱交替形は延長階梯の反映に等しい*e-j- (後記のSchumacher (1998) による表記では*æj-) であったが、この*e-j- は重複 *e+語根*e-j-, すなわち*e-e-j- と認識され、*ijj- へと発達したという。しかしBammesberger (1986: 117) ではまた異なる見解を提案しており、iddj- は完了形ではなく未完了形*é-ej-m (Skt áyam[*āya<*e-ej-mに代わり]) に由来し、これがGmc *eejun>*eijun>*ijjun>Go *iddjunとなり、ここからGo iddja, iddjēdunが形成されたとしている。上記 2 つのいずれの見方も出発点と途中経過は Lindeman (1968) とは大きく異なるものの、*ijj- のゲルマン祖語における前段階が*e-ej- >*e-ij- となっている点は偶然とは言え同じである。またBammesberger (1986: 117) はēodeについても見解を変えており、Sehrtと同じく*jā- (Skt yā- ‘gehen, fahren’) の未完了形*e-jā-tに由来するとしている。ただしSehrt は*e-jā- >Gmc *i-jō-という中間段階を仮定しているのに対し、Bammesberger (1986: 117) は*e-jā>Gmc *ejō>WGmc *e(j)u>eu>OE ēoという音過程を提案しており、この場合はBammesberger自身も認めているように、後続の*j がe>iの上げを引き起こすことなく消失するという音過程が前提として求められることになる。

Schmidt (1984: 228) は、ēode も iddja もOCS jadq ‘fahren’に対応し、どちらもdh- 現在形から形成された未完了形*e-H₁jā-dh-e/o- に由来し、これが*Hj- >*jj- という音変化を伴って Gmc *ejjōd- >*ijjōd- となり、ここからēode, iddjaへと発達したとしており、これは Lindeman (1967) と同様IE *H₁ej- のゼロ階梯の拡張形*H₁jeH₂- を前提としたものである。しかし前記で述べたように、語頭に*iを有していた形がēodeという通例形となるとは考えにくい。そこでSchmidt は Gmc *ijjōd- >*ejjōd- への逆成が起こったと考える。すなわち強変化動詞 7 類においてかつての語根音節に (Gmc au>) *ōを有していた場合、その重複過去は例えばGmc *e-auk (Go aiauk ‘increased’) >*e-ōk>OE *ēocのように新たに生じた語根母音ēoを有していたと考えられることから、この重複過去への類推により、こうした逆成が起こったのだという。そして*ejjōd- は本物の重複過去のように母音で始まる重複過去*e-jjōd- として扱われ、北・西ゲルマン語では重複過去に見られる現象として*eと*ōの縮合に先立って*jj- がももとの語根初頭の子音であったものと同様の扱いを受けて消失したためにēod- となり、さらに弱変化のēodeへと発達したという。

Voyles は iddja の成り立ちを説明するに当たり、*jj- そのものの形成過程について新たな提案を試みている。Voyles (1989: 25, 27; 1992: 94f.) はこの*jj- は強勢二重母音の第二要素*i- が*j-, そしてさらに*jj- への音変化を受けた結果

であり、まず*-i-は母音の前で*-j-となり、ゴート語でさらに*-j-が*-jj-となるのはこの*-j-に語中形態素境界 (word-internal morpheme boundary) + 母音e, ē, i, ī が後続していた場合であったとしており、その実例としてtwaddjē (twai ‘two’ の属格複数)、そしてiddja, iddjēdunを挙げている。例えば twaddjē は*twai + ē > *twaj + ē > *twajjē > twaddjē という音過程の結果であったということになる。さらにVoyles (1989: 27, 46; 1992: 95) は完全階梯*ei- ‘go’ に弱変化動詞1類の過去形の接辞*-id-ōが付加された単数形である*ei + id + ōがこの音韻規則によってまず*ej + id + ō > *ejjidō > *eddjidō > *iddjidōとなり、さらに複数形についても同様に*ei + id + ēdunが*ej + id + ēdun > *ejjidēdun > *iddjidēdunとなり、この*iddjidēdunから2番目の*-id-が重音省略的 (haplologically) に削除されてiddjēdunとなり、さらに単数形の*iddjidōにも同じことが類推的に起こった結果がiddjaであったという。またēodeについてもVoyles (1992: 268) は完全階梯*ei-を出発点とし、*ei-に弱変化動詞2類の接辞が付加された*ejōdōに由来し、これが*ēodeとなったと考える。しかしこの場合もまたLindeman (1967)、Bammesberger (1986) と同様、*ejō > OE ēoという音過程を提案としたものであり、*jは先行するe > iの上げを引き起こすことなく、あるいは引き起こす前に消失するという音過程が前提として求められることになる。

Voylesの見解において注目すべき点としては次のことが言えるであろう。すなわちiddjaとēodeのいずれに関しても、他の複数の学者が頼ってはいるものの、ゲルマン語派では強変化動詞7類の過去形以外でははっきりと証明されない重複 (reduplication) や、ゲルマン語派ではその痕跡もはっきりと確認できないような加音 (augment) も喉音も、そしてアブラウトも持ち込むことなく、すべて正常階梯の*ei- + 接辞という、より簡潔なプロセスを展開している。確かに、過去形が喉音を有するさらに古い段階の*H₁ei-, *H₁ej-やSeeboldの提案する*ejH-に基づくものであった、あるいはSchmidtの提案する*e-H₁jā-dh-e/o-のような喉音を有する未完了形であったとする前提に立つなら、*jHまたは*jHjを有する最古の過去形も理論上は考えられるのかもしれないが、あくまでもVoyles (1989) はゲルマン祖語における喉音の存続も、従って喉音に起因する音変化そのものも認めない自身の立場を貫いている。

Mottausch (1994: 128) は前記のLindemanが提案した一連の多くの音変化や類推については懐疑的であり、とりわけLindemanが*H₁ej-ではなく*H₁jeH₂- > *jā-を出発点としていること、重複形であったものに類推的にさらに重複が加わったとしていること、そしてLindeman自身が西ゲルマン語における最終段階として提案するに至った単数1人称*eu、2人称*e-iz、3人称*eu、複数人称*e-u-のようにēodeの土台となる*euが生じたのは*iの前で*jが落ちた単数2人称*e-izの影響で残りの形*ēju、*ej-u-においてもまた*jが落ちたためとしている点など、数々の類推に基づく提案を疑問視している。またMottausch (1994: 128) はēodeがGmc *wad-a-と同根であるとするHolthausen (1903: 342)、Flasdieck (1937: 63) の見解を明確に却下しており、のちにHolthausen (1974³: 91) 自身もこの自らの見解を撤回している。そしてSchmidtが前記のようにēodeもiddjaも未完了形*e-H₁jā-dh-e/o-に由来するとしているのに対し、Mottausch (1994: 128) は*jjが喉音と*jとの結合により生じたとする見方をVoyles (1989) と同様に疑問視し、また*-dh-による拡張はあくまでもスラヴ語派における現象であり、ゲルマン語派には当てはまらないとしており、さらにゲルマン語派においては加音*e-の付加された未完了形が残存していた証拠らしきものも他に類例が見当たらないとして、Schmidtの見解を却下している。

また単数形*eoja/e > *eaa/eがēodeの土台となる*eoとなったとするCowgillの見解については前記のようにMottauschも疑問視しており、さらに複数形*ejjūtが強変化動詞1類*bhe-bhid-ūtの音節数に合わせて*eiūtとなり、そこへ自動的にわたり音が生じて*ejjūtとなったとするCowgillの見解に対しても同じく懐疑的である。しかしいずれにしてもゲルマン語派では*H₁ei- または*H₁ej-の正常階梯の強変化動詞形としての現在形は早期に死滅し、さらに完了形における重複が放棄された結果、*H₁ei-の完了形は孤立し、さまざまな改変を受けやすくなっていた可能性は否定でき

ないであろう。

Mottausch (1994: 133f.) によると、*H₁ei- の前ゲルマン語における最古の完了形は単数 1、2、3 人称が *e-ôj-a、*e-ôj-ta、*e-ôj-e、複数 1、2、3 人称が *e-i-mé、*e-i-té、*e-ij-ŋt だったのであり、3 人称複数は結局 Cowgill が提案したのと同じ *e-ij-ŋt となっているが、Mottausch は Cowgill がその前段階として仮定した *e-j-ŋt は認めず、それはもともと明らかに強変化動詞の 3 音節形 (*bhe-bhid-ŋt) に密接に依拠して形成された *e-i-ŋt だったのであり、そして Cowgill と同じく *i と音節主音的子音 *ŋ との間にわたり音 *j が発生したとしている。

次にゲルマン祖語の第 1 段階における変化形は単数 1、2、3 人称が *e-aj-(a)、*e-aj-p(a)、*e-aj-(e)、複数 1、2、3 人称が *e-ij-um(e)、*e-ij-ud(e)、*e-ij-un であったという。

ここで特に注目すべき変化は 3 人称複数の接辞 IE *ŋt から生じた母音 u が複数形全体に一般化されたとしている点である。そして Mottausch (1994: 134f.) によると、次の段階としては語尾の末尾の母音が脱落するが、強勢は強変化動詞 7 類の過去形と同じく第 1 音節すなわち重複音節に移動するまでは引き続き語根にあったと考えられる：単数 1、2、3 人称 *e-ái、*e-áj-p、*e-ái、複数 1、2、3 人称 *e-ij-um、*e-ij-ud、*e-ij-un。そして西ゲルマン語では 2 人称単数は理論的には強変化動詞の特徴として *e-áj-p から語根はゼロ階梯で接辞としては *-iz (< IE *-es) を反映する *e-ij-iz あるいは Lindeman の提案した *-iz を有する *e-ij-iz に取って代わられたと考えられる。次に強勢が第 1 音節である重複音節に移動したために強勢を有するようになった重複音節が語根と解釈されたことによって重複音節とものと語根との間に途切れがなくなると、単数形 (1、3 人称) は *e-ái から *éai へ、複数形 (3 人称) は *e-ij-un から *éjjun となった。

ここまでが古英語とゴート語へと分裂する前段階であり、ここから Mottausch (1994: 136ff.) はさらに独自の理論を展開していく。すなわちゴート語では強勢を有する e は i となり、無強勢の *-ai は *a となった結果 *eai は *ia となり、さらに複数形 (*éjjun >) *ijju- の影響で *ia は *ijja となったという。そして *ijja、*ijjun はそれぞれ Go iddja、*iddjun となり、iddja が弱変化と解釈し直されると、*iddjun もそれに引き寄せられて iddjedun へと置き換えられたという。

西ゲルマン語では、複数形 *éjjun が *eiju- となったのに対し、単数形 *eai は強変化動詞 7 類と同様 *eē に、さらに縮合により *ē となり、そしてこの単数形 *ē はこのように短く不明瞭で孤立したような語形であったために排除され、古英語では変化表としては複数形に由来する *eiju- > *eu (> ēo) に道を譲ることになり、これが弱変化形に移行した結果が OE ēode であったという。しかしまず問題となるのは西ゲルマン語の段階では *éjjun あるいは *eiju- がもはや e > i の上げなしに *eu を経て OE ēo となったとされる点である。Mottausch、そしてすでに Seebold (1970: 175) も指摘しているように Gmc *ejj- の反映を示すかもしれない実例は他には見出されず、また *éjjun > *eiju- > *eu という音変化そのものも証明が困難であることを Mottausch 自身も認めており、新たな前提としてのこの音変化が証明されて初めて *eiju- が OE ēode の前段階であると言えるのではないだろうか。そこで Mottausch がこの音変化を裏付ける可能性のあるものとして挙げている実例の中で特に注目しておきたいのは前記の Lindeman も挙げている *þriju (Go þrija) 'three' > OE þrio、þreo であり、*iju は *iu を経て io、さらに ēo となったのと同様、WGmc *eiju- > *eu > OE ēo という音変化があった可能性は否定できないかもしれない。同様のことは Bammesberger (1986)、Voyles (1992) が前提とする *ejō のケースについても言えるであろう。すなわち Gmc *auj- > POE *ēaj- > OE iēj- > ij- (OE frigea、OS frōio、Go frauja 'lord')、Gmc *ajj- 'egg' (ON egg) > WGmc *aij- > POE *āj- > OE æj- (OE æg、OS、OHG ei) のように後続の j によるウムラウトが起こり、かつその j が存続しているケースとは異なり、*ejō、*eiju- という音結合においては e > i の上げは起らず、しかもこの *j または *ij 自体も何の痕跡も残さずに消失するという新たな音韻法則が前提として求められる。

Schumacher (1998) は、古英語についてはゴート語のように*ejj- を前提とするのであれば、あくまでもそれはe>iの上げにより*ijj- または*tj- となっていたはずであり、またそれはēodeではなく*iodeという結果を生み出していたはずであったとして、ēodeの起源を*ejj- に求めることはできないと主張する。

Schumacher (1998: 184-187, 198) は‘go’を*H₁ei-でなく、語幹形成母音*e/oが後続した場合を明確に意識した形と思われるH₁ej-としてとらえることにより、その語根構造としては*H₁ed-‘eat’と同系列であったと見なし、しかも両者は日常での使用頻度が高かったと思われることから、強変化動詞5類(*H₁ed->) Gmc *et- (OE etan、OHG ezzan、Go itan) の過去形でその母音が延長階梯の反映に等しい*æt- ~ æt- (OE æt- ~ æton、OHG āz、āzun、Go ēt ~ ētun) の影響により、ゲルマン祖語におけるその過去形としてGmc *æj- が形成されたとしている。さらに*et- ~ *æt- ~ *æt- についてもSchumacher (186f.) は、その前段階であったと考えられる*et- ~ *öt- ~ *æt- (<*ed- ~ *öd- ~ *ed-<*H₁ed- ~ *H₁eH₁od- ~ *H₁eH₁d-) そのものが6類の中でも*aC- ~ *öC- ~ *öC- (<*H₂eC- ~ *H₂eH₂oC- ~ *H₂eH₂C-) のように語根が同じく母音で始まるもの (ON aka ‘fahren’ ~ ók ~ óku; OE alan ‘nähren’ ~ öl、ON ala ‘hervorbringen’ ~ ól ~ ólu; Go uzanan ‘aushauchen’ ~ uzōn) からの影響を受けた結果であったとするLindeman (1968: 76) の見解を支持している。

従ってSchumacher (188) はゲルマン祖語における*H₁ej- の最古の過去形の変化表は*æj- に過去形の接辞が付加された単数1人称*æja、2人称*æita、3人称*æje、複数1人称*æime、2人称*æide、3人称*æjunであったとしている。そしてSchumacher (189f.) によると、単数1、3人称、複数3人称において母音間にあったjが消失した。さらにこれら以外の形においてはOsthoffの法則により*æiは*eiとなった結果、単数1、2、3人称は*æ'a、*eita、*æ'e、複数1、2、3人称は*eime、*eide、*æ'unとなったという。すなわち単数においても複数においてもアプラウトとはもともと無関係な*æ'と*eiの交替が生じたことになる (この母音間の*jの消失、すなわち*æjV>*æ'Vという音過程が容認可能なものかどうかは疑問である。この点については後記で改めて触れることにするが、とりあえずこの解釈に従うこととする)。

次の段階としてSchumacher (190f.) は、複数1、2人称における接辞が*-u- 語幹化 (-u-Thematisierung) により*me>*-u-me、*de>*-u-deとなったとしている。そしてさらにOsthoffの法則により*æi- が*ei- に強制的に短化されたことへの抵抗とも思える代償的な変化として*jの重音化により (*ei- +u->) *eju- は*ejju- となった結果、単数1、2、3人称は*æ'a、*eita、*æ'e、複数1、2、3人称は*ejjume、*ejjude、*æ'unとなったという。すなわちこの変化表は*æ'-、*ejj-、*ei- という3つの異形態を有することになる。そしてここからGo iddjjaとOE ēodeへと分岐していくことになる。

まずゴート語では3つの異形態のうち*ejj- が一般化され、さらに*ejj- が*ijj-、*ei- が*t- となった結果、Schumacher (193) が示すとおり、単数1、2、3人称は*ijja、*ita、*ijje、複数1、2、3人称は*ijjume、*ijjude、*ijjun、そしてさらに*-jj- が*-ddj- となり、*a、*eが消失すると、単数1、3人称は*iddjあるいは*iddi、2人称は*it、複数1、2、3人称*iddjum、*iddjud、*iddjunとなる。そしてこの変化表は語幹*iddj- に基づいて弱変化過去iddja、iddjēdunなどへと改造されることになる。

他方、Schumacher (194) は、西ゲルマン語では(*æj->)*æ'- が一般化され、2人称単数は接辞が*-taから*-izに取って代わられて*æ'-izとなり、また単数1、3人称が(*æ'a、*æ'e>)*æ、そして古英語では、複数ではすべて3人称の形態が一般化された結果(*æ'un>)*æwunとなったとしている。もちろん*wについては、その前段階である*æ'unにおいて*æ- と*-unとの間の途切れ (hiatus) を排除するために挿入されたという解釈を前提としたものである。このことを裏付けると考えられる例として挙げておきたいのがOE sāwan ‘sow’ (Go saian、ON sá、Lith sėti

‘sow’、OE *sæd* ‘seed’）であり、Kroonen（2013: 428）が明確に述べているように、*wは途切れを解消するために挿入されたものであろう。なお**æ'un*はSchumacherの仮定する**æwun*よりもむしろ*wuの前での*æ>a*の変化により**awun*となるのが本来の発達と考えられるため、変化表としては単数1、3人称は**æ*、複数は**awun*とすべきではないかと思われるが、単数1、3人称の影響で**æ*を有する**æwun*であったという解釈なら可能であろう。

そして最終的に過去形としてはこの**æ'*に弱変化動詞2類の接辞*-*ūd/-ōd*-が付加された結果 *ēode*、*ēade*となったというのがSchumacherの見解である。さらにSchumacher(197f.)は、ウェストサクソン方言以外の資料では綴り字<eo>と<ea>の区別が明確ではなかったとは言え、**æ+ū/ō*が(Gmc *eu*>)OE *ēo*のみならず(Gmc *au*>)OE *ēa*との融合も一部には起こっていた可能性も否定できないとしている。*æ*と弱変化動詞2類の接辞との縮合と見る見方は前記のSeeboldにおいても見られるが、SeeboldがSchumacherとは異なるのは、*æ*の起源は強変化動詞5類型のGmc *æ*ではなく、強変化動詞1類型のGmc **ajj*-であったとしている点である。しかしその起源がいずれであったにせよ、**æ+ū/ō*が一見それに最も近いと思われる*ēa*よりもむしろ結果としては若干かけ離れたような*ēo*となっているのは、*ēo*がGmc *eu*のような本来の二重母音に由来するものではなく、原始古英語における語形変化上の再編により生じた二次的な音群の縮合による混乱した結果の一端と見なすこともできるかもしれない。

最後に、Schumacherの見解について疑問視すべきと思われる点が1つある。それは前述のように、ゲルマン祖語において単数1、3人称**æja*、**æje*、複数3人称**æjun*が*jの消失により**æ'a*、**æ'e*、**æ'un*となったとしている点である。しかもかつての*jの存在とその消失の根拠としてはSchumacher（189）自身がGmc **sæ-ja-*に由来すると見なすGo *saian*[*sc:an*] ‘sow’である。そしてこのように*jを有する形の根拠とされていると思われる同族語を代表するものとしてLith *sėju*、OCS *sějo*を挙げることができるであろう。しかしKroonen（2013: 428）が述べているように、ゲルマン祖語形において*jが存在していた痕跡はなく、ゲルマン祖語形は元来あくまでも**sæ-a*だったのではないだろうか。そしてこれがNWGmc **sāan*となり、古英語ではwが挿入された結果*sāwan*となったと考えられるのである。

確かにゴート語でも3人称単数形にはjを伴う*saijþ*[*sc:jiθ*]が*saiiþ*[*sc:iθ*]と並んで存在するが、より古い本来の形はあくまでも*saiiþ*であり、Voyles（1992: 89f.）が主張するように、これは強勢母音*ai[e:]*と語中形態素境界+母音*i*との間にわたり音としてjが挿入された結果であったと考えられる。従ってSchumacherの主張に沿ってOE *ēode*を導き出す場合、Gmc **sæ-ja-*>Go *saian*におけるような*jの消失という見方に基づくGmc **æja*、**æje*、**æjun*>**æ'a*、**æ'e*、**æ'un*という音過程については見直しと再考が必要であろう。あくまでも**æj*-を前提とするのであれば、**æj*-自体は*jを保持しながらもある時点で弱変化動詞2類型の、*jなしに形成される過去形**æ*（>WS *æ*、NWS *ē*）+*-*ūd/-ōd*->OE *ēode*、*ēade*に至ったとも考えられる。土台とされるこの**æj*-の真の出所がGmc **æj*-であったにせよ、あるいはSeeboldが仮定する**ajj*-であったにせよ、実証はされないものの、過去形**æ+ūd/-ōd*-の基礎となったかもしれないその弱変化動詞2類としての不定詞**æjōjan*>**æjejan*>**æjjan*>**æjan* = **æġan*（>WS **æġan*、NWS **ēġan*）が理論上は考えられるのであり、またそれがいったんは形成されたものの、それ自体が早期に失われた結果、孤立した*ēode*、*ēade*は*gangan*、*gān*の完全に不規則な補充過去形としての道を歩んだのかもしれない。

しかしWS *æ+ūd/-ōd*-からは*ēode*ではなくやはり*ēade*となるのが自然な発達ではないかという疑問が生じることも確かであろう。すなわち*ēode*の場合、語根母音は実はWS *æ*でなくNWS *ē*だったのであり、そこへ接辞としては*-*ad*-への弱化が起こる以前の段階の*-*ōd*-が付加されたもの、あるいは本来は複数形のものであった*-*ūd*-が付加されたもの、あるいは*-*ūd*-の短化による*-*ud*、*-*od*-が付加されたものが縮合を経てウェストサクソン方言に借用されたのが*ēode*であったのかもしれない。そしてさらに*ēade*はより後期の形成に由来し、NWS *ē*に接辞としては弱化後の*-*ad*-が付加され、縮合された結果であった可能性も考えられるかもしれない。すなわち、2類の*macian* ‘make’

(<*makōja-)、fiġan ‘hate’ (<*fiġōja-)の過去形 macode(<*makōd-)、fiode、fiade(<*fiġōd-)を例にとると、共時的にはどちらもmacian [makjan]、fiġan [fi:jan]から[-jan] (-ian,-ġan)を削除し、Gmc *-ōd-の反映を付加することにより得られると解釈できるのと同様、ēode、ēadeもまた理論的には*æġan [æ:jan]、*ēġan [e:jan]から[-jan]を削除し、Gmc *-ōd-の反映を付加することにより得られるという解釈も可能ではないだろうか。

3. 結語

Go iddjaについてはIE *H₁ei- (*H₁ej-)を出発点として*ijj-を経てiddj-となった結果であったとする見方が大勢であるが、*ijj-に至るまでの過程については意見が分かれている。またOE ēodeについてはLat vādō、Gmc *wad-a-と同根であるとする見方とGo iddjaと同じく*H₁ei-にさかのぼるとする見方に大別されると言えよう。ēodeの場合、前者の可能性は今ではほとんど顧みられることのない昔の少数意見となってしまうとは言え、可能性としては必ずしも完全に排除されるべきものでもないと思われる。そして後者についても*H₁ei-からOE ēoに至る過程の細部についてはかなり意見が分かれている。

Cowgillはo-階梯の*eōja、*eōje、ゼロ階梯の3人称複数を出発点とし、後者からは比較的容易に*ijj- > iddj-を導き出している一方で、*eōja、*eōje > *eaja、*eaje > *eaa、*eae > Gmc *eō > WGmc *eu (> OE ēo)とする提案はあまり支持が得られてはいないようである。Lindeman (1967)が提案する*H₁ej-のゼロ階梯の拡張形*H₁jeH₂-からēodeとiddjaに至るまでの過程はあまりにも多くの複雑な類推を前提としたものであり、またSeeboldが*H₁jeH₂-を出発点として提案する*ejH-とそのゼロ階梯、そしてそこから*ijj-に至る過程における音変化、そしてo-階梯を前提としたēodeに至るまでのプロセスについても大いに疑問が残る。Voylesは喉音もアブラウトも重複(reduplication)も加音(augment)も前提とはせず、iddjaは*ei- + 弱変化動詞1類の接辞*-id-に、ēodeは*ei- + 弱変化動詞2類の接辞*-ōd-に由来し、前者からはそのまま*ijj-が生じ、後者は*ejōd- > ēodeとなったとしており、本稿で取り上げた諸見解の中でVoylesの見解は最も簡潔なプロセスを提案していると思われるのであるが、問題はVoylesだけでなくBammesberger (1986)もまた前提として挙げていた*ejō > OE ēoという音変化である。またMottauschはCowgillと同様、重複とアブラウトを前提とした変化表を出発点としているものの、まずCowgillとは大きく異なるのは*eōja、*eōje > *eaja、*eajeにおいて最初に消失した接辞は語中の*jではなく末尾の*-a、*-eであり、*eu > OE ēoは重複接頭辞*-e-を有したo-階梯ではなくゼロ階梯に由来する複数形WGmc *ejju- > *eiju-であったとしている点である。

このようにOE ēoの前提として提案された*ejō、*ejju、*eijuのような音連続においては後続の*j、*iに起因するe > iの上げがあったとする見方が一般的であると思われるのであるが、それでもそこからe > iの上げなしにēoに至ったのだとすれば、上記のような音連続の場合、西ゲルマン語では後続の要素*j、*iが実はe > iの上げを起こすことなく消失するという音過程の結果であったということが前提として求められることになる。

Schumacherは‘go’のゲルマン祖語における過去形は*H₁ed- ‘eat’のそれである強変化動詞5類としての*æt-と同じくGmc æを有する*æj-であり、もっぱらこの*æj-がさまざまな過程を経てēodeとiddjaに至ったとしている点がユニークである。Schumacherの提案する*æjV > *æVという音過程は容認できるものではないが、Seeboldがēodeの基礎となる古英語の形態として提案したのもSchumacherによるものとはその出発点も成立過程もまったく異なるものの、偶然にも*æj-であり、しかもここから弱変化動詞2類型の過去形として形成されたのがēodeであったとしている。またiddjaを*æj-から導き出そうとする試みにおいてもやや複雑なプロセスを前提としている点に無理がないとは言えないかもしれない。

しかしēodeとiddjaの双方の出発点と成立過程について最も簡潔な提案をしているのはやはりVoylesではないだろ

うか。他方、Schumacherによる提案はVoylesよりもやや複雑なプロセスを前提ととするものの、新たに注目すべきものと言えるかもしれない。なお、VoylesとSchumacherによる提案ではゲルマン祖語における出発点とする形態も異なり、それぞれに問題点もあるが、この両者の提案については可能であればさらに見直すべき点は見直し、また印欧祖語の段階にまでさかのぼるアブラウト、重複、加音を前提とした他の学者たちの提案についても再度精査することにより、また今後新たな提案が生まれることを願いつつ、問題の解決へのさらなる進展が可能となることを期待したい。

[参考文献]

- Bammesberger, A. 1984. *Studien zur Laryngaltheorie*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Bammesberger, A. 1986. *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Cowgill, W. 1960. "Gothic *iddja* and Old English *ēode*." *Lg.* 36, 483-501.
- Flasdieck, H. M. 1937. "Ae. *dōn* und *zān*." *Anglia* 61, 43-64.
- Hogg, R. M. 1992. *A grammar of Old English*. Vol. I: *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Hogg, R. M. & R. D. Fulk. 2011. *A grammar of Old English*. Vol. II: *Morphology*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Holthausen, F. 1903. "Etymologien." *IF* 14, 339-342.
- Holthausen, F. 1934. *Gotisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Kroonen, H. 2013. *Etymological dictionary of Proto-Germanic*. Leiden: Brill.
- Lindeman, F. O. 1967. "Gotisch *iddja* und Altenglisch *ēode*." *IF* 72, 275-286.
- Lindeman, F. O. 1968. "Althochdeutsch *ier*." *NTS* 22, 74-82.
- Mottausch, K.-H. 1994. "Idg. **h₁ei-* „gehen“ im Germanischen." *HS* 107, 123-140.
- Müller, S. 2007. *Zum Germanischen aus laryngaltheoretischer Sicht. Mit einer Einführung in die Grundlagen der Laryngaltheorie*. Berlin: de Gruyter.
- Ringe, D. & A. Taylor. 2014. *The development of Old English: a linguistic history of English*. Vol. II. Oxford: Oxford University Press.
- Rix, H. 2001². *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Reichert.
- Schmidt, G. 1984. "Got. *standan*, *gaggan*, *iddja*." *Sprachwissenschaft* 9, 211-230.
- Schumacher, S. 1998. "Eine alte Crux, eine neue Hypothese: gotisch *iddja*, altenglisch *ēode*." *Die Sprache* 40, 179-201.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Sehrt, E. H. 1944. "The origin of the Germanic weak preterite." *Lg.* 20, 238-240.
- Voyles, J. B. 1989. "Laryngeals in Germanic." *American Journal of Germanic Linguistics and Literatures* 1: 17-53.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego: Academic Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.